

## 博物館と生態学 (5)

### 地域の自然が博物館—フィールドミュージアムの活動—

白川 勝信

北広島町立高原の自然館

#### はじめに

博物館の魅力は「本物」に出会えることだ。ピカソが描いた巨大なゲルニカを見て彼の強い憤りを実感するにはマドリッドのソフィア王妃芸術センターに行くべきだし、ファン・ゴッホが最後の書簡で「最も計画的に描いたカンヴァスの一つ」と言及しているドービニーの庭はひろしま美術館に行かなければその筆致を見られない。沖縄のひめゆり平和祈念資料館で延々と流れる生存者の肉声を記した証言映像は、「物」としての資料でなくとも戦争の悲惨さを直接心に訴える。活字資料や統計資料では伝えきれない「本物」の声がそこにはある。

自然史博物館の展示も同じである。愛媛県立博物館では、1975年以降生存個体が見つからないニホンカワウソの剥製を展示しているし、倉敷市立自然史博物館の2階にぎっしりと展示された昆虫標本を見れば、来館者は地球上には実に多様な昆虫が存在していることを実感できる。しかし、生態学という目で見たととき、そこには何かが足りない。むしろ、足りないものの方が多すぎる。私が所属している高原の自然館に展示されているオオコノハズクの剥製にはダニは一匹も取り付いていないし、ブナの輪切りはいつまでも年輪の数が変わらない。ジオラマのテンはいつまで経ってもアカショウビンの巣を襲わない。資料を永続的に一定の状態では保管するという博物館の使命は、相互干渉や時間という軸が不可欠な生態系の営みとは相容れないものである。その足りない物を補うために、自然史博物館の学芸員は、日夜頭を悩ませているのだ。

動物園や植物園、水族館、昆虫館などは、この命題に

対する一つの回答と言える。旭山動物園で行なわれている動物の行動習性に基づく生態展示は、動物園の動物を単なる形態展示以上のものとして来園者に示した好例である。

博物館が本物の自然を取り扱うためのもう一つの回答として、フィールドミュージアムが挙げられる。博物館という建物の中で展示することが困難ならば、野外にあるものを博物館に持ち込むのではなく、野外にあるままで展示を行おうという考え方だ。本物を見せるということに関して、フィールドミュージアムは最も有効な方法である。フィールドミュージアムという言葉は、フィールドそのものを博物館として捉え、そこにある事物や事象を博物館の展示物とする概念であるが、日本国内では様々な使われ方をしている。千葉県立中央博物館が行っている「房総の山のフィールドミュージアム」のように博物館が行う事業を指す場合もあれば三瓶フィールドミュージアム財団、広島フィールドミュージアム、屋久島オープンフィールド博物館など、フィールドミュージアム活動を行う団体の名前として使われる場合もある。また、行政がその行政区画全体を博物館と見なしてフィールドミュージアム事業を実施する場合もある。本稿では生態学に関わる学芸員が野外において行う博物館活動をフィールドミュージアム活動とし、各地の館で展開されている特色のあるフィールドミュージアム活動を紹介し、生態学研究者との関わりについて述べてみたい。

#### フィールドと博物館の連携

目の前の展示物を説明する博物館内の解説に対し、フィールドミュージアムでは「見えていない物」を解説することも大切な要素だ。たとえば、滋賀県最高峰であり、多くの固有種を有する伊吹山の山頂部には、植物の名前

を記したパネルが花の写真と共に設置されている。このような展示は国立・国定公園や森林公園でごく一般的に見られ、目の前にある花や樹の名前を簡単に知ることができるだけでなく、花の咲いていない季節にも、どのような花がその場所にあるのかを知ることができる。また、沖縄市にあるラムサール条約登録湿地、漫湖にかかる「とよみ大橋」の橋脚には、コウノトリやクロツラヘラサギなど、橋から見下ろしたマングローブ林で確認された野鳥についてのパネルが設置されている。これらの野鳥は常に見られるわけではないが、パネルを見ることで眼下のマングローブ林がどれほどの生物を育てているかを実感することができる。

フィールドにおける展示は、市民が博物館と出会うきっかけにもなりうる。たとえば、鹿児島県川内市内の国道10号線沿いにはタイヘイヨウアカボウモドキの巨大なパネルが、分布域などの説明とともに設置されている。タイヘイヨウアカボウモドキの標本は世界でも7例しかないが、その一つ、しかも世界でただ一つの全身骨格標本が「いおワールドかごしま水族館」に展示されている。パネルが設置されている場所は、骨格標本となった個体が漂着した地点であり、通りかかった人はその生物が地球上に存在していることを現実味を持って知ることになる。世界的にも貴重なタイヘイヨウアカボウモドキの標本が博物館にあると知れば、足を伸ばしてみようかなと思う人もでてくるであろう。

博物館とフィールドが隣接している場合には、両者が動的に連携した展示が可能となる。また、来館者自身が博物館の活動に携わる仕掛けがしやすいというのもフィールドミュージアムの魅力の一つである。高原の自然館には、来館者自身がその日に野外で観察した物を書き残すためのホワイトボードを置いている。このホワイトボードの情報は4日間保管されるので、来館者はその時期に観察できる植物や野鳥を確認し、スタッフに観察地点を聞くことができる仕組みだ。記入されたデータは毎日、館のデータベースに蓄積されるので、館としては地域のフェノロジーを大まかに把握でき、観察時期などの問い合わせに答えるのに役立っている。

釧路湿原の温根内ビジターセンターに設置されている「自然伝言板」にも同様の仕掛けが見られる。こちらのボードには湿原内の地図が印刷されており、来館者やスタッフが日付とともに観察した物を書き込むことができるようになっている。ここで重要になるのは、目印になる物が少ない湿原で自分の居る場所を把握する方法だが、木道には等間隔に番号が設置されており、ビジターはそ

の番号が書かれた白地図を受け取ることで、最長4.2 kmの周回散策路の中で、自分の位置を正確に知ることができる。

このように、野外の展示はそこで完結するものでなく、館内の展示とリンクすることで大きな効果を得ることになる。フィールドミュージアム活動において、博物館の建物は来館者が情報を得るためのフィールドへの入口であるとともに、情報が集約、再活用される場所でもある。

## 市民参加の野外活動

解説パネルの設置や観察ルートの掲示による解説方法では、ビジターは自分自身で情報を得られる。観察ルートやポイントを紹介した「セルフガイド」と呼ばれるリーフレットの配布もビジター自身が読み取るという点で同じ性格の解説方法である。これらと並んで、ガイドを伴う野外観察会は最もポピュラーなフィールドミュージアム活動だ。第54回生態学会愛媛大会の自由集会「博物館の生態学3」において、参加した博物館関係者に対してアンケート調査を実施したところ、回答が得られた15館のうち「フィールドミュージアム」という位置づけで事業を行っているとは回答したのは6館であったが、全ての館が観察会など、何らかの形で野外での活動を実施していた(表1)。学芸員が指導・補助を行う野外活動では、回数が限られることや、活動内容によっては一度に参加できる人数に限りがあることなどで、セルフガイド等に比べると対象となる人数はかなり少ない。しかし、参加対象に合わせたきめの細かい解説ができるために、高い教育効果が得られる。また、学芸員とビジターとが直接の接点を持つことで、ビジターに博物館への帰属意識を持たせ、博物館と深く結びつきたいいわゆる「リピーター」を増やすことに繋がる。

表1. 博物館が行うフィールドミュージアム活動

活動内容	実施館数
講師による現地での解説	15
住民が参加する調査活動	12
室内での講義	11
地域住民が参加する保全活動	10
種名札の設置	6
ガイド・インタープリターなどの養成講座	5
案内板の設置	4
ルートマップの配布	4

地域の自然を対象とするフィールドミュージアムが成り立つためには、このような結びつきは重要である。博物館の使命は資料を収集・整理して、保存し、展示しながら、これを研究することにあるが、自然を対象としたフィールドミュージアムでは、現地にあるがままの自然の情報を整理し、保存し、展示しながら、これを研究することがその使命であると読み替えられる。フィールドミュージアムの理念が詭弁に終わらないためには、収蔵物と見なした地域の自然を保存（保全）するための取り組みをしなければならない。そこでは、博物館の館内における標本の保存とは異なり、継続的なモニタリングや、関係機関との調整・連携が必要となる。とりわけ、農村生態系の保全においては、一般市民の参加や地域住民の理解と協力が不可欠だ。

高原の自然館で2007年開催予定の全27回の市民参加活動のうち、6回は生態系保全に関わる調査や作業で、湿原の調査、山焼き、草刈りなどそれぞれの地域に即した活動が含まれている。たとえば、山焼きは地域の中で伝統的に行われていた草原の管理・利用形態だが、農業形態の変化や人手不足によって草原が放置され、遷移が進行しつつあった。牛馬の放牧、堆肥としての利用、茅葺き屋根への利用など、草原を維持していた農村文化が失われつつある中で草原生態系を維持していくためには、かつてとは異なる管理システムをつくる必要があった。

草原の保全活動において自然館が担っているのは、技術を持つ地域住民と、それを手伝える都市ボランティアとの共同作業をコーディネートすることである。また、地元住民の中に山焼きの経験者が残っている今の間に、次世代へと火を扱う技術を継承していく必要があり、地元の小学生を対象とした環境教育も同時に行っている。各参加者は、山焼きという一つの活動を通じて、草原における生物の多様性や、生態系を維持してきた地域独自の技術や文化とその意義について知ることになる。野外における「保存」の取り組みは、市民参加型の活動として実施することで、その活動自体を展示として位置づけることができる。

### 小さな博物館

岩国市立マイクロ生物館は2005年7月にオープンしたばかりの施設である。その名前のおり、研究・展示の対象としているのは顕微鏡レベルの微生物で、フロア面積も小さな実験室ほどで、非常に小さい。学芸員もわずか2名であるが、積極的にフィールドミュージアム活

動を行っている。その一つ、「赤潮プランクトンマップをつくる会」では、一般市民が6回の講習会を通じて微生物の知識を学びながら赤潮の発生調査を行った。講座は、参加者がプランクトンネットを自作するところからはじまり、次の講座までに参加者自身でプランクトン採取して、講義で解説を受けるという形式だ。この講座の優れている点は、参加者自身が調査道具を作成することで調査意欲を喚起・持続することと、調査道具の作成や調査方法が簡便であるために多様な参加者が見込めることだ。2006年度の事業では、中学生から60才まで幅広い層からの参加を得ている。

マイクロ生物館のような小さな博物館施設は、近年、各地に作られている。鳥根県瑞穂町のはんざけ自然館や、山口県美東町の秋吉台エコミュージアム、徳島県上勝町の千年の森ふれあい館、新潟県十日町市の里山科学館越後松之山「森の学校」キョロロなどは、都市から離れた場所に作られた施設であり、設立当初から地域のフィールドにおける博物館活動を主要な事業としている。

高原の自然館も学芸員は一人、展示室も一つの小さな施設だ。野外における調査資料を研究報告書として発行し、観察会や野外調査などフィールドを主体に事業を進めているが、標本庫は持たず、企画展も行っていない。標本の収集・保存を行わない館を、はたして博物館として扱って良いのだろうか？

約7万点の標本管理と年間3回の企画展をたった一人の学芸員が担っている面河山岳博物館への公共交通機関は1日2便のバスしか無く、松山市からは自動車で片道1時間半の距離がある。こうしたアクセスしにくい環境にもかかわらずリピーターを作っているのは、単に自然が豊かな場所にあるというだけでなく、館員と来館者が直接話をしやすい環境だと指摘する。また、地域に密着した活動を行なう際には、土地所有権や水利権、漁業権などを把握することに加え、地域住民の理解を得る必要があるが、地域住民とスタッフが互いのことを知っているような小さな博物館では、様々な面で住民の協力が得られやすい。来館者と学芸員の接点が多いことは小さな博物館の利点である。

各地に作られている小さな博物館を従来の自然史博物館と同列に扱うことはできない。また、自然度の高いフィールドに近いということは、都市部の利用者にとって交通の便が悪く、おのずと来館者も限られることになる。しかしながら、小さな博物館だからこそ実現できる博物館活動もある。学芸員が地域のコミュニティに加わることで、地域住民と外部からのビジターが博物館を通じて

相互に接点を持つことになる。ビジターがフィールドで目にする生物や環境に地域住民の生活という要素が加わることで、博物館活動の対象とするフィールドが、人間の社会活動から切り離されたモデルとしての生態系としてではなく、歴史性や社会性を含んだ実態を伴う生態系として示される。そうすることで、ビジターは、単なる観察やトレッキングの場としてフィールドを利用するのではなく、様々な物が存在することの背景について考え、行動するようになる。こうしたレスポンスブル・ツーリズムの実現や、地域を越えたコミュニティ作りのためには、地域とビジターを繋ぐ仲介者が必要であり、小さな博物館が存在することで、地域生態系の適切な利用と保存が両立できるのではないだろうか。

### 生態学研究者とフィールドミュージアム

ここまで博物館の立場からフィールドミュージアム活動について書いてきたが目を転じて生態学者とフィールドミュージアムの関係について考えてみたい。

野外で調査をしている研究者にその調査地の面白さを聞いたときに、答えられない研究者はいないだろう。研究者が調査を行うのは、対象としている調査地に何らかの興味深い事象なり事象なりがあるからであり、生態学という視点から調査地を説明するならば、研究者本人が最も詳しく説明できるはずだ。現に、博物館とは関係なく、個人的にフィールドミュージアム活動を行っておられる研究者も存在する。

学術論文が一般の人たちに読まれる機会は希だが、フィールドでの調査・研究結果を博物館に持ち込むことで、研究成果を地域に還元でき、生態系保全や地域学習の動きを引き起こす可能性もある。例えば、本城ほか(2005)が明らかにしたサクラソウにおける地域個体群間の遺伝変異は、サクラソウの自生地地域の住民に対して、他地域からの持ち込みが遺伝子汚染を起こすことを印象づけ、博物館と地域が連携した取り組みとして保全方針の方向付けに寄与した。また、木村ほか(2007)の研究は湿原堆積物の花粉分析から地域の植生変遷を解析するという基礎的研究であるが、研究過程で得られた「湿原では泥

炭の蓄積が6500年前頃から始まり、およそ1.2 m堆積している」という分析結果が、地域住民に対しては湿原の重要性を印象づけ、ビジターに対しては、一步の踏み込みが湿原の長い歴史を破壊するということを説明する材料になっている。研究結果を論文として記録し、伝えていくのは研究者の責務だが、学芸員はそれらを一般の人たちに伝えるという職務を担っている。もし、野外調査を行った地域を活動の場に行っている博物館があるならば、どのような小さなことであっても研究成果を博物館に提供していただきたい。そうすることで博物館は「本物」の生態系をフィールドに展示することが可能になる。生態学とフィールドミュージアムは親和性が高い。

### 謝 辞

本稿の執筆にあたり、アンケート調査にご協力頂いた方々と博物館施設をここに記し、お礼申し上げる：鈴木まほろ氏(岩手県立博物館)、佐藤友香氏(福井市自然史博物館)、須田大樹氏(埼玉県立自然の博物館)、亀田佳代子氏・草加伸吾氏(滋賀県立琵琶湖博物館)、橋本佳延氏(兵庫県立人と自然の博物館)、日比伸子氏(檀原市昆虫館)、清末幸久氏(鳥取県立博物館)、井上雅仁氏(鳥根県立三瓶自然館)、田原義寛氏(秋吉台エコミュージアム)、佐々木光江氏(秋吉台科学博物館)、佐野明子氏(岩国市立ミクロ生物館)、田中浩氏(山口県立山口博物館)、矢野真志氏(面河山岳博物館)、小川誠氏(徳島県立博物館)、真鍋徹氏(北九州市立自然・歴史博物館)。また、佐久間大輔氏(大阪市立自然史博物館)、畑田彩氏(総合地球環境学研究所)、三橋弘宗氏(兵庫県立人と自然の博物館)には有益なコメントを頂いたことに感謝したい。

### 引用文献

- 本城正憲・津村義彦・鷲谷いづみ・大澤良(2005) 広島県芸北町サクラソウ集団の葉緑体DNA変異. 高原の自然史 10・11:81-90  
 木村裕子・岡崎宏明・三好教夫(2007) 広島県北広島町長者原湿原堆積物の花粉分析. 高原の自然史 12:1-9